

# 子ども同志の交流を目的とした読書活動における ICT の活用

庭井 史絵†

抄録 本研究では、1人1台端末と高速通信ネットワークの整備がすすむ学校での読書活動で、ICTを活用する方策について検討することを目的とし、文献調査と視察による事例収集、並びに、研究協力校（小学校）での試験的な取り組みと検証を行った。その結果、本を読むことだけではなく、読んだ本を記録して共有したり、子ども同士で本を紹介し合ったりする読書活動においても、ICTを積極的に活用できる可能性と意義を確認することができた。一方、(1) 教員や児童が利用しやすいアプリケーションやプログラムが不足している、(2) 教員が情報の保存、共有、発信に迷いや不安を持っている、(3) このような活動が児童の継続的な読書行為に結びつくのか検討する必要がある、という課題があることも明らかになった。

キーワード : 学校図書館 読書教育 ICT 電子書籍

## Use of ICT in reading activities for the purpose of interaction among children

Fumie Niwai†

Keywords School library, Reading instruction, ICT,

### 1. 読書活動における ICT の活用

GIGA スクール構想のもと、学校での「1人1台端末」と「高速通信ネットワーク」の整備がすすみ、あらゆる分野でICT（情報通信技術）を活用した教育が模索されている。小・中・高等学校で行われている読書教育においても、情報環境の変化が子どもの読書にどのような影響を与えるのか、また、読書活動にICTをどのように活用できるかが議論されている。

例えば、文部科学省による「令和4年度子供の読書活動の推進に関する有識者会議」（2022年6月）では、(1) 発達段階に応じた読書習慣の形成、(2) 高校生が読書をするようになるきっかけづくり、(3) 読書とICT（情報通信技術）のベストミックス、(4) その他が、主たる検討事項であった。特に(3)の読書とICTとの関係については、「スマートフォン、電子書籍の普及やSNSなどのコミュニケーションが多様化する中で、読書とICTとのベストミックスを探る必要がある」として、「ICTの活用を読書活動にどう結び付けていくのか」「紙と電子書籍それぞれの強みを活かした読書活動をどのように考えるべきか」の2つが具体的な課題とし

て挙げられている<sup>1)</sup>。

有識者会議での議論を経て2023年3月にまとめられた「第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」（以下、第五次計画）には、4つの基本的方針のひとつに「デジタル社会に対応した読書環境の整備」が挙がっており、電子書籍サービス導入の他、読書への関心を高める取り組みとして「読書記録のためのアプリ等に共同的な活動を可能とする仕組みを付加」「オンラインの読書会」など、読書活動におけるICT活用が例示されている<sup>2)</sup>。

この第五次計画でも度々言及されているように、子どもの読書活動におけるICT活用でまず注目されるのは、電子書籍サービスの利用である。文部科学省の総合教育政策局と初等中等教育局も、「1人1台端末環境下における学校図書館の積極的な活用及び公立図書館の電子書籍貸出サービスとの連携について」という事務連絡を発出し、学校図書館や公共図書館による電子図書館サービスを学習に生かすよう要請している（2022年8月）<sup>3)</sup>。

子どもが実際にどれぐらい電子書籍を利用できるかと言えば、例えば、「令和4年度子供の読書活動の推進

† 青山学院大学 教育人間科学部

等に関する調査研究（電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査）」の報告書によると、「すべての公立学校で電子書籍サービスを導入している」と答えた自治体の割合が 3.8%、「一部の公立学校で電子書籍サービスを導入している」が 4.7%となっており、あわせて 8.5%の地方自治体が、公立学校に電子書籍サービスを導入していることが分かる<sup>4)</sup>。また、一般社団法人電子出版制作・流通協議会が公表した「公共図書館電子図書館サービス（電子書籍サービス）実施図書館」によると、2020 年 4 月 1 日時点で電子書籍が利用できる自治体は 94 であったが、2023 年 4 月 1 日現在では 504 に増加している<sup>5)</sup>。子どもたちが学校で、あるいは地元の公共図書館で、電子書籍を読むことができる環境は徐々に広がってきているのである。

このように、電子書籍の利用は読書教育における ICT 活用のひとつではあるが、それだけで十分というわけではない。文部科学省が作成した『教育の情報化に関する手引-追補版-(令和 2 年 6 月)』によると、学校教育で ICT が特に効果を発揮するのは、個々の関心や特性に応じたカスタマイズ、資料の提示、焦点化、情報共有、意見交換、交流、履歴の記録、振り返り、作品制作、情報発信の各場面である（下線は筆者による）<sup>6)</sup>。これを読書教育の場面に置き換えてみると、読む対象を印刷媒体（紙の本）から電子媒体（電子書籍）へと拡張するだけでなく、さまざまな読書活動に ICT を取り入れることによって、効果を上げることができると考えられる。

第五次計画に挙げられた電子書籍以外の ICT 活用の例は、読書記録のデジタル化と、オンラインの読書会の二項目であった。一方、2021 年と 2022 年に「子供の読書活動優秀実践校」として表彰された 260 校の報告に見られる読書活動の中には、「図書の紹介」「読書記録」「読み聞かせ」で ICT が活用されていた。具体的には、おすすめの図書を紹介する場合、動画を作成して教室や家庭から見られるようにしたり、図書館便りを学校ホームページに掲載したり、Google クラウドスライドを使って配信したり、blog 等の SNS で発信したりするという取り組みである。また、読書記録をつける際に、インターネット上のサービスを利用したり、端末にインストールされたアプリやポートフォリオを活用したりする事例や、読み聞かせを動画で配信している事例もあった。ただし、このような取り組みの数は全 2,008 件中 20 件に過ぎず、全体の中では少数にとどまっている<sup>7)</sup>。

つまり、子どもの読書活動で ICT を活用する方策としては、電子書籍を端末で読むという行為に注目が集まる一方、子どもを読書へ誘う活動においては、その可能性は示唆されているものの、具体的な取り組み方や効果的な利用法、課題については、議論も実践も深まっていないと言える。

そこで本研究では、1 人 1 台端末を読書教育でも活用したいと考える小学校で、読書活動推進のために ICT の機能を生かせる場面を考え、実際に授業を計画、実践しながら、その意義と課題について検討することとした。本稿では取り組みの経緯と、議論を通して得られた結果について報告する。

## 2. 交流を目的とした読書活動

前述した専門者会議の「論点まとめ」によると、読書に対する子どもの関心を高めるためには、「友人等の同世代の者とのつながりをこれまで以上に一層生かし、子供同士での本の紹介や話し合い、批評といった協働的な活動の実施が有効」とされている<sup>8)</sup>。そのため、本研究においても、子どもの読書意欲を喚起するような相互交流を生み出す取り組みに焦点を合わせることとした。

読書意欲の喚起を目指した取り組みには、読み聞かせやブックトークなどさまざまなものがあるが、子ども同士の交流や協働的な活動を伴う「本の紹介」「話し合い」「批評」としては、

- 読書会
- 書評合戦（ビブリオバトル）
- ペア読書
- ブッククラブ
- リテラチャー・サークル

などが挙げられる。これらは参加型の取り組み、すなわち、場を共有することが求められる活動であることから、例えば、ICT を活用してオンライン形式で開催すれば、離れた場所にいる子ども同士が交流できるかたちをつくることのできる。

本を紹介する活動としては、この他に、

- 読書郵便
- POP（紹介カード）や本の帯の作成
- おすすめの本についてスピーチ

などもあり，これらは作品制作や，情報発信と共有の過程で，ICT を効果的に活用する可能性がある活動と言える。

### 3. 小学校での試験的取り組み

#### 3.1 研究協力校の概要

本研究では，文部科学省リーディング DX スクール事業の指定校でもある，仙台市の公立小学校の協力を得ることができた（在校生約 970 名）。リーディング DX スクール事業とは，標準的な GIGA 端末に組み込まれた汎用性の高いソフトウェアとクラウド環境を活用した効果的な教育実践を創出・モデル化し，その取り組みを全国に広げることがを目的としており，国内の小・中・高等学校から約 200 校が推進校として指定されている<sup>9)</sup>。本研究の協力校もそのような学校のひとつとして，教員と児童が GIGA 端末を「日常使い」することが推奨されていることから，読書活動で ICT を活用する場合も，機械の操作に不安が少なく，スムーズに学習活動に取りかかることができるという状況にあった。そのなかで主に，2 年生と 5 年生を担当する 2 人の教員と実践や議論を重ねながら，子どもの読書活動に ICT を活用する可能性と課題について検討した（文末の謝辞に掲載）。

最初に，校内全体の取り組みを把握するため，読書教育に関心のある教員に対する質問紙調査を行い，15 名の教員（2 年生担当 3 名，3 年生担当 4 名，4 年生担当 1 名，5 年生担当 3 名，6 年生担当 3 名，その他 1 名）から回答を得た。普段取り組んでいる読書教育の内容について，①教員から児童へ本を紹介する活動，②子ども同士で本を紹介しあう活動，③その他，に分けて尋ねたところ，①では「教室で本を紹介する」「教室や廊下に本を展示する」「読み聞かせ」などが行われていた。また，②では「グループ内で紹介しあう」「教室や廊下に本を展示する」「1 人がクラス全員に向かって紹介する」などが行われていた。③では「読んだ本を記録する」「読後に感想文を書く」「一斉読書（朝の 10 分間読書など）」といった活動が挙げられた。

次に，これらの読書活動に ICT を活用しているか尋ねたところ，「POP 作成のフォーマットをロイロノートで配布し，作品も共有できるようにした」「ロイロノートを用いて読書の記録をつけた」「本をモニターに投影しながら読み聞かせを行った」「音声入力機能を使っ

て本を読んだ感想を入力した」「読んだ本の感想をロイロノートのテキストに書いた」「家読ノートで記録し提出させた」といった事例が挙げられたが，ごく少数，かつ記録する活動に偏っており，GIGA 端末を使い慣れている小学校でも，読書活動ではあまり ICT が活用されていないことが分かった。

#### 3.2 QR コードを使った本の紹介

質問紙調査の結果を踏まえ，子どもたちにとってなじみがあり，かつ，読書意欲を喚起することができる「子供同士での本の紹介」に，ICT 活用の効果が高いとされている「交流」「作品制作」の要素を組み合わせた活動を考えることにした。

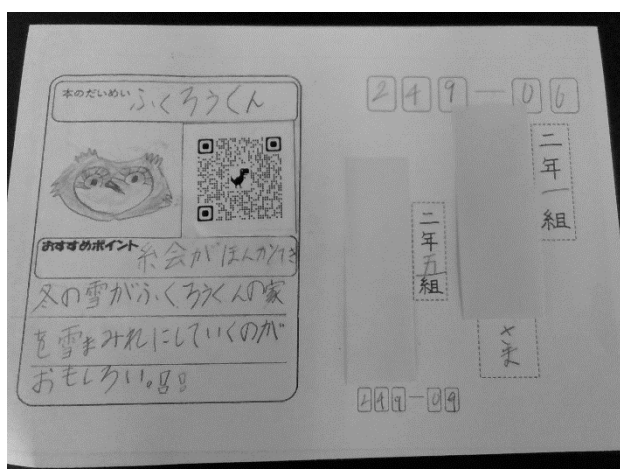
いくつかの読書活動を検討した結果，まず，本を紹介する短い動画を作成し，QR コードを使って当該図書にリンク先を貼り付けて展示し，視聴できる仕組みをつくることにした。おすすめ本として廊下や学校図書館に展示された図書に関心を持った場合，端末から QR コードを読み取ることで，その動画を視聴することができるという形である（図 1）。QR コードは，直接本に貼付するのではなく，帯やしおり，またはカードを用意し，小型のシールに印刷したものを貼り付けるようにした。子どもによっては，自分の似顔絵をカードに描き，QR コードが自分からのメッセージであることを強調するなど，印象的に伝える工夫をしているものもあった。

本を紹介する動画は，まず教員が作成し「先生からのおすすめの本」として，QR コード付きで展示した。子どもたちは，いろいろな学年の先生が，表情豊かに本を紹介する動画がいつでも見られることを楽しんでおり，展示された本に関心を向けていた。



（図 1）QR コードをカードに貼付して廊下に展示

また、違うクラスや学年の子どもにおすすめの本を紹介する手紙を送る「読書ゆうびん」に、動画の QR コードを貼付し、手書きの文章と共に楽しんでもらう取り組みも行った(図2)。これは前述の「本の展示」と比べると、一対一の交流を通して本に出会ってもらう活動になるが、推薦の言葉に加えて、動画によるメッセージが相手により強い印象を与え、紹介された本を読んで感想を送り返そうという動機も生まれていた。また、動画を作成する側にとっては、短い時間でその本の魅力を分かりやすく伝える工夫が求められるが、撮り直しも可能であるため、よりよい作品づくりを目指して試行錯誤できるという利点があった。



(図2) 読書郵便に貼り付けられた QR コード



(図3) 上級生による本の紹介動画を見る下級生

さらに、図書委員が本の表紙画像に音声吹き込みかたちの紹介動画を作成し、学校図書館の地域開放でその動画を流し感想をもらう、という活動も行った(図4)。QR コードを活用して、来場者のスマートフォン等で視聴してもらうというアイデアもあったが、学

外に子どもの作品である動画が広がることの是非について議論ができなかったため、大型モニターに展示するにとどめた。



(図4) 図書委員による本と紹介動画の展示

これらの活動で、本を紹介する動画を共有する仕組みとして、最初は Google Classroom を使って学校のサーバーに動画を保存し、アクセスのための URL を QR コードにして本に貼付するというかたちをとったが、より使いやすく、コメントやリアクションを返せる方法として、教育向け動画ツール flipgrid (<https://info.flipgrid.com/en-us.html>) やオンライン掲示板アプリ Padlet (<https://ja.padlet.com/>) も試用した。

#### 4. 成果と課題

有識者会議の論点まとめによると、子ども同士の交流や対話は、「読む本の幅を広げるきっかけとなったり、他者の異なる考えを知り、それを受容したり改めて自分自身の考えを見つめ直す経験ができる」といった効果が期待できる」とある<sup>10)</sup>。本研究では、一方的な情報発信に終わりがちな「本の紹介」を、ICT を活用することによって、対話やコミュニケーションを生み出すかたちに変化させることを試みた。

授業や委員会活動での取り組みを通して、本の紹介動画の作成という創作活動は、本に関心が薄い子どもも楽しんで取り組み、発信された動画を繰り返し見て、本への関心を高めている様子が見られるなど、一定の成果が得られたと言える。また、子ども同士の交流だけではなく、学校司書が紹介動画を作成して図書館の本に貼付するなど、新たな広報ツールとしての可能性も確認することができた。

一方、課題としては、以下の3点を挙げることができる。まず、教員や児童が利用しやすいアプリケーションやプログラムが不足している、という点である。研究校では Google Classroom を日常的に活用しているが、クラス内で動画を共有する場合「課題」として提出させるとうまく共有できず、ストリームに上げると相互に視聴できた、など、教員同士で情報交換しながら、よい保存と共有方法を探る必要があった。Flipgrid や Padlet は使いやすいものではあったが、教員が個人的にアカウントをとって利用していたため、生徒の作品や感想をどの程度まで上げてよいか、コンセンサスをつくる必要があった。今後は、学校や教育委員会が管理運営できるサービスやアプリケーションを開発、契約することが求められる。

次に、教員が情報の保存、共有、発信に迷いや不安があり、学校や自治体でガイドラインを作成する必要があるということである。例えば、図書館の本の帯に QR コードを付ける場合、学校図書館の地域開放の際にどのように取り扱うかという問題が生じた。著作権や個人情報保護の観点から、検討する必要がある。

本研究では、子ども同志の交流を目的とした読書活動に ICT を活用する可能性について実証的に検討し、これらが、本を介したコミュニケーションを生み、本への興味関心を喚起することについては、一定の効果を認めることができたが、この取り組みが継続的な読書行為へ結びつくかどうかは、別の方法での検証が必要であると言える。今後、ICT の機能を読書教育に生かすより良い方策についてさらに検討を重ね、新しい読書教育プログラムを創出することが求められる。

## 謝辞

本研究は、2021～2022 年度青山学院大学情報メディアセンター研究プロジェクト「小学生による「本の紹介と対話」プログラムの構築—1 人 1 台時代の学校図書館における読書指導」(研究代表者：庭井史絵)の助成を受けたものである。本プロジェクトをすすめるにあたっては、共同研究者である杉本卓氏(青山学院大学教授)や田中和美氏(青山学院初等部教諭)から助言や事例の提供を受けた。また、読書教育の実践と検証にあたっては、仙台市立錦ヶ丘小学校(当時)の菅原弘一校長と、同校教諭の保坂真由美氏、海谷智恵氏と共同でプログラムを開発し、成果と課題について議論した。ここに記して感謝申し上げる。

## 参考文献

- [1] 文部科学省. 子供の読書活動推進に関する有識者会議設置要綱. 2022 年 6 月 7 日. [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/040/gaiyou/1388287\\_00001.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/040/gaiyou/1388287_00001.htm) (参照 2023-06-30)
- [2] 文部科学省. 第五次子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画. 2023 年 3 月 28 日. [https://www.mext.go.jp/content/20230327mxt-chisui01-100316\\_01.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230327mxt-chisui01-100316_01.pdf) (参照 2023-06-30)
- [3] 文部科学省総合教育政策局, 文部科学省初等中等教育局. 1 人 1 台端末環境下における学校図書館の積極的な活用及び公立図書館の電子書籍貸出サービスとの連携について. 2022 年 8 月 2 日. [https://www.mext.go.jp/content/20220810-mxt\\_jogai01-00011648\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20220810-mxt_jogai01-00011648_1.pdf) (参照 2023-06-30)
- [4] 株式会社リベルタス・コンサルティング. 令和 4 年度「子供の読書活動の推進等に関する調査研究(電子図書館・電子書籍と子供の読書活動推進に関する実態調査)」調査報告書. 2023 年 3 月. [https://www.mext.go.jp/content/20230607-mxt\\_chisui02-00008064\\_2.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20230607-mxt_chisui02-00008064_2.pdf) (参照 2023-06-30)
- [5] 一般社団法人電子出版制作・流通協議会. 公共図書館電子図書館サービス(電子書籍サービス)実施図書館(2023.04.01 版). [https://aebs.or.jp/pdf/Electronic\\_Library\\_20230401.pdf](https://aebs.or.jp/pdf/Electronic_Library_20230401.pdf) (参照 2023-06-30)
- [6] 文部科学省. 教育の情報化に関する手引-追補版-(令和 2 年 6 月) 第 4 章教科等の指導における ICT の活用. 2020 年 6 月. [https://www.mext.go.jp/content/20200701-mxt\\_jogai01-000003284\\_005pdf.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200701-mxt_jogai01-000003284_005pdf.pdf) (参照 2023-06-30)
- [7] 庭井史絵. 小・中・高等学校の読書活動における ICT 活用の可能性: 「子供の読書活動優秀実践校 文部科学大臣表彰」の取り組みから. 青山学院大学教育人間科学部紀要. 2023. Vol.14, p.1-13.
- [8] 文部科学省. 子供の読書活動推進に関する有識者会議論点まとめ～全ての子供たちの読む喜びを育む読書活動の推進～. 2022 年 12 月. [https://www.mext.go.jp/content/20221227-mxt\\_chisui02-000026353\\_12.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20221227-mxt_chisui02-000026353_12.pdf) (参照 2023-06-30)
- [9] 文部科学省. リーディング DX スクール. <https://leadingdxschool.mext.go.jp/> (参照 2022-10-20)
- [10] 前掲[8]